

LIBRARY NEWS

令和5年5月19日 No.2

新座市立第三中学校

校長 石田 和男

(図書室だより) 図書整理員 名本 浩子

木々の緑が深く、まぶしい季節になりました。あまりに気持ちがいからなのでしょうか、平林寺境内の広大な林から、鳥が元気な声で鳴いているのが聞こえてきます。

「目には青葉 山郭公 初鯉」(現代語訳：目には、初夏の青葉が美しく、耳には、ほととぎすの鳴く声が聞こえる。口では、初物の鯉を味わえる。夏がきたのだなあ。)

これは、江戸時代の俳人、山口素堂の一句です。ふつう、俳句では季語を一つ入れますが、この句では、「青葉、ほととぎす、初鯉」と、三つの季語が使われています。季重なり(一つの句に季語が2つ以上ある)は、内容がぼけるため、避けるべきこととされていますが、名句とされるものの中には、季重なりのものもあり、山口素堂のこの句もその一つに挙げられています。初夏の風物三つを調子よく読みこんだ この句は、当時から大いに人気を得たそうです。五感を豊かに刺激して、夏の到来の喜びを表現した句です。

この句は、山口素堂が、35歳くらいのときに鎌倉で詠んだものですが、約350年前にも、山口素堂が、わたしたちと同じように、美しい深緑を味わっていたのかと思うと、感慨深いですね。

ところで、みなさんは、借りる本、買いたい本が決まっていないとき、どうやって本を選びますか。書店であれば、POP や本の帯、裏表紙に簡単な内容紹介のある文庫本もあります。図書室で本を借りるときはどうでしょう。特に、好きな作家はいない、興味のある分類もない。本は読みたいけれど、何を讀んだらいいか迷っていると、ブックカバーのイラストやデザイン、写真などに目が留まり、思わず その本を手にするのではないのでしょうか。

初夏を感じる本はないだろうか、と、本棚を探していると、今の季節らしい本を見つけました。2020年に受賞した「流浪の月」に続いて、「汝、星のごとく」で、2023年の本屋大賞を受賞した、凧良ゆう さんの、「わたしの美しい庭」という本です。タイトルどおり、美しい庭園の絵が表紙になっています。表紙のイラストは、植田たてり というイラストレーターが描いたもので、同じデザインの冬仕様のカバーや、文庫版では水中の庭、秋の庭のカバーもあるようです。どの季節のカバーも、それぞれの良さがあり、すべて集めて並べてみたくなります。でも、今の季節には、やはり初版のデザインがぴったりだと思います。

さて、そこで、今年度初のクイズは、この「わたしの美しい庭」からの出題です。屋上に小さな神社と庭園があるマンションを舞台に、そこを訪れる“生きづらさ”を抱えた人たちとわたし(百音)の物語。彼らの住むマンションの屋上には、小さな神社があり、正式には『御建神社』というが、地元の人たちからは気安く『屋上神社』などと呼ばれている。

では、問題です。この神社は、そのご利益から、地元の人たちから、他の呼び方をされていますが、そのご利益とは何でしょう。

- ① 恋愛成就をはじめ、友人や仕事などよい縁にめぐりあう「縁結び神社」
- ② 病気、悪癖など断ち切りたいものとの悪縁を切ってくれる「縁切り神社」
- ③ 不幸な出来事や災難などを避けたり禊ったりしてくれる「厄除け神社」



周りのうわさなんて気にしないでいい。自分の気持ちのままでいい。自分らしく生きる。読み終わると、心の痛みが和らぎ、暖かくなる。凧良ゆう さんらしい作品です。分類番号913、**27**の棚にあります。ぜひ、読んでみてください。

令和5年度 第69回「青少年読書感想文全国コンクール」
中学校の部の『課題図書』が届きました！

来室をお待ち
しています！

令和5年度、第69回「青少年読書感想文全国コンクール」の中学校の部の『課題図書』を紹介します。



『スクラッチ』 歌代 朔/作 (あかね書房)

コロナ禍で、中学校最後の夏の大会が中止になったバレエ部キャプテンの鈴音。美術部部長の千暁は出展する予定の「市郡展」の審査がなくなった。「平常心」と自分に言い聞かせ、県の出展作「カラフルな運動部の群像」を描き続ける。モデルは鈴音だ。しかし、鈴音があやまってその絵に墨を飛ばしてしまう。そこで千暁は、黒のアクリルガッシュで絵を塗りつぶし、パレットナイフで黒の塗膜を削っていく。「黒い絵の具の中から、僕が描いていたあざやかな色合いが、虹色が、細く細く顔をのぞかせる。」

受賞のために、審査員の好みの構図や色合いに寄せて描いてきたが、もういやだ。絵に自分の腕を描き足す。これが自分だ。

—コロナ禍に黒く塗りつぶされた中三の夏。その下に、それぞれの鮮やかな日常が埋まっている—
部活動への思い。進路。現状につまずいたり、先が見えなくて不安に感じたりしても、前に踏み出す勇気をくれる一冊です。

「スクラッチ」(ひっかき)

あらかじめ下塗りした色の上に違う色を塗り重ね、その後、上の色をひっかいて削り取り、下の層の色を出す絵画技法。



「アップステージ」とは、主役がかすむようなことをすること。

『アップステージ シャイなわたしが舞台に立つまで』
ダイアナ・ハーモン・アシャー/作 武富 博子/訳 (評論社)

—シャイで目立つことが大きいシーラ。でも、心の中では思ってる。「学校ミュージカルに出演したい!」って。—学校ミュージカルの演目は、メレディス・ウィルソン作、『ザ・ミュージック・マン』。

オーディションの結果、シーラは4人組の合唱団「バーバー・カルテット」役に。ひげ付きの男役。はじめは気がのらないシーラだったが、家族や先生、仲間に励まされ、自分の役を心から愛するようになる。

主役のモニカの持ち物がなくなったり、楽譜が切りきざまれたり、リハーサル直前にプロの演出家が練習から手を引いたりトラブル続出。本番でもモニカが足を骨折。どうなる、この舞台?!

この本を読み終えた後、チームとしての意識を高め、舞台をやり遂げた子どもたちやシーラが友だちをつくって大きく成長する姿に、ミュージカルを見終わった後のような大きな拍手を贈りたくなるでしょう。

1957年初演のブロードウェイの最高傑作。昨年、ブロードウェイリバイバルが上演され、日本でも、今年上演されている。

『人がつくった川・荒川 水害からいのちを守り、暮らしを豊かにする』

長谷川 敦/著 (旬報社)



- ・「荒川」の名前の由来：字のごとく、大雨が降ると水害で人を困らせた“荒れる”川。その荒川は、2回、流れを大きくつくりかえられた。
- ・荒川がもともと流れていた場所は今の「隅田川」。新しく西につくった放水路が今の「荒川」。
- ・普通の川は、下流に行くほど川幅が広がるが、荒川は中流に川幅日本一の場所がある。2537メートル!



運搬や交通手段など生活を豊かにする舟運のほうをとるか、川の氾濫を防ぐほうをとるか。人々は川とのつきあい方を変えた。

この本を読んで、川の名前の由来や流域に住む人々にとって、川はどんな存在だったのかなどを知りたくなりました。

今の荒川は、水害から人とまちを守るためにつくられたのね。